

# 長期戦略:テーマ 「特長ある一貫教育の創出」

提出日 2023年1月16日

担当部署
------

## II.実施計画帳票

長期戦略テーマの責任者 (統轄部署)	林常任理事 (一貫教育) (総務部)	実施計画の 担当部署	高等部
-----------------------	--------------------------	---------------	-----

### 1. 実施計画

実施計画(タイトル)	取組開始	達成状況 確認年度	学部・研究科での 取組み有/無	帳票
4-(4)-⑤ “AI活用 for SDGs”「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」 ～Society 5.0に向けた WWLC リーディング・プロジェクト～	2019年度	2024年度	必要なし	不要
<b>内容</b>				
<p>拠点校である関西学院高等部はこれまでの SGH 事業の取り組みや教育資源を活用し、“AI活用 for SDGs”「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」の構想名に基づく先進的なカリキュラムの研究開発・実践を行う。</p> <p>また、管理機関である学校法人関西学院は持続可能な取組への支援等による体制整備を行うとともに、スーパーグローバル大学である関西学院大学が中心となり、拠点校をはじめ、国内外の連携校、国外の大学、企業、国際機関等と協働し、AIの活用によりSDGsの課題を解決できる能力を涵養することを通じて、Society 5.0を牽引し世界で活躍できるビジョンや資質・能力を有したイノベティブなグローバル人材の育成を目的とする。</p> <p>2019年度は、管理機関である学校法人関西学院、スーパーグローバル大学である関西学院大学が、WWL 構想の目的を達成するため、拠点校をはじめ全国の連携校が形成するアドバンストラーニングネットワーク(以下、AL ネットワークと記す)において、以下のプログラムを提供する。</p> <p>1) WWL・AI活用人材育成プログラム、2) SDGs・地域課題等社会課題を解決するための実践的な学びへの支援、STEAM 系の「探究・課題研究」への支援(講師派遣等)、3) アドバンストプレースメント(単位履修・高大連携科目)の検討、4) Harvard College Japan InitiativeX関西学院大学ワークショップ、5) 高校生公開討論会、6) 関西学院世界市民明石塾、7) 探究甲子園(仮称)、8) 高校生国際交流のつどい</p> <p>WWLの事業委託期間が2021年度をもって終了したことに伴い、担当部署を高等部単独に変更する。ALプログラムとして集約していたものについては既存部署にて、委託前と同様のやり方で運営していく。</p>				
進捗状況を測る指標	指標名	定義・算式		
指標1	【管理機関】 アクティブラーニングプログラム事業の実施	予定したアクティブラーニングプログラム(以下、ALプログラムと記す)事業を予定通り実施したかどうかの実績→WWLの事業委託期間が2021年度をもって終了したことに伴い、本指標は終了とする。		
指標2	【高等部】 コンピテンシー評価	ツール: AiGROW 対象生徒: 「グローバル探究 BASIC」受講の1年生 計測項目: 「課題設定」「論理的思考」「地球市民」項目のコンピテンシー評価		
指標3	【千里国際高等部】 探究型授業における識者へのインタビュー実施人数	探究型授業における、識者へのインタビュー実施人数/年 →WWLの事業委託期間が2021年度をもって終了したことに伴い、本指標は終了とする。		

## 目標1&lt;指標1&gt;【管理機関】ALプログラム事業の実施

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
目標	ALプログラム事業の実施	ALプログラム事業の実施	ALプログラム事業の実施			
実績	WWL・SGHX探究甲子園はCOVID-19の感染拡大防止のため中止となったが、その他の事業は予定通り実施。	高校生公開討論会は廃止(探究甲子園に統合)、明石塾は中止となったが、その他の事業は実施した	オンラインも活用し、プログラムを実施した。			

## 目標2&lt;指標2&gt;【高等部】コンピテンシー評価

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
目標	—	受講後に評価ポイントが上昇した生徒が60%	受講後に評価ポイントが上昇した生徒が70%	同左	2022年度までの実施状況を踏まえ、検証ツールを含めて再検討する	同左
実績	—	62%の生徒の該当コンピテンシー評価ポイントが上昇した。	57%の生徒の該当コンピテンシー評価ポイントが前年度と比較して上昇した。			

## 目標3&lt;指標3&gt;【千里国際高等部】探究型授業における識者へのインタビュー実施人数

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
目標	—	20名	20名			
実績	—	32名	11年生フィールドスタディで協働した企業・団体 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 株式会社古賀印刷</li> <li>● 千早赤阪村役場</li> <li>● 国立文楽劇場</li> <li>● 72時間サバイバル教育協会</li> <li>● 関西学院大学神戸三田キャンパス</li> </ul> 三重県伊賀市モクモクファーム			

## 2. ロードマップ

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	
【管理機関】 アドバンスネットワーク によるプログラムの提供	策定段階	1)WWL・AI活用人材育成プログラム 2)SDGs・地域課題等社会課題を解決するための実践的な学びへの支援、STEAM系の「探究・課題研究」への支援(講師派遣等) 3)アドバンスプレースメント(単位履修・高大連携科目)の検討 4)Harvard College Japan InitiativeX関西学院大学ワークショップ 5)高校生公開討論会 6)関西学院世界市民明石塾 7)探究甲子園(仮称) 8)高校生国際交流のつどい	1)WWL・AI活用人材育成プログラム ①AI活用人材育成講座(ストリーミング)(通年) ②AI活用人材育成プログラム・ワークショップ(8月) ③AI活用人材育成プログラム・ネットコミュニケーション(通年・新規) ④Sci-Tech リサーチ・フォーラム(AI活用部門・新規) 2)SDGs・地域課題等社会課題を解決するための実践的な学びへの支援、STEM系の「探究・課題研究」への支援(講師派遣等) 3)WWL 校対象のアドバンスプレースメント(単位履修・高大連携科目)の検討 4)Harvard College Japan Initiative X 関西学院大学ワークショップ 5)高校生公開討論会 6)関西学院世界市民明石塾 7)WWLx探究甲子園 8)高校生国際交流のつどい	1)WWL・AI活用人材育成プログラム ①AI活用人材育成講座(ストリーミング)(通年) ②AI活用人材育成プログラム・ワークショップ(8月) ③AI活用人材育成プログラム・ネットコミュニケーション(通年・新規) ④Sci-Tech リサーチ・フォーラム(AI活用部門・新規) 2)SDGs・地域課題等社会課題を解決するための実践的な学びへの支援、STEM系の「探究・課題研究」への支援(講師派遣等) 3)WWL 校対象のアドバンスプレースメント(単位履修・高大連携科目)の検討 4)Harvard College Japan Initiative X 関西学院大学ワークショップ 5)高校生公開討論会 6)関西学院世界市民明石塾 7)WWLx探究甲子園 8)高校生国際交流のつどい			
	2023年3月末段階	1)～6)を実施 7)はCOVID-19対策のため中止、8)は契約前のため2019年度は対象外	—	WWL事業終了に伴い、各プログラムの継続可否も含め、見直しを行う。			
	策定段階						
	2023年3月末段階						
		2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	-	

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
【高等部】 拠点校によるプログラムの提供	策定段階	—	1)1年次プログラムのブラッシュアップ、 2)2年次選択必修科目(「AI活用演習」「グローバルスタディ」「ハンズオンラーニング」)の実施	1)1年次、2年次プログラムのブラッシュアップ 2)2年次選択必修科目の発展科目の実施 3)国際会議(平和構築に向けた国際シンポジウム)の開催	1)1年次、2年次プログラムのブラッシュアップ 2)2年次選択必修科目の発展科目の実施 3)国際会議(平和構築に向けた国際シンポジウム)の開催 4)連携校オンライン教員交流会の開催 5)連携校オンライン生徒交流会の開催	同左
	2023年3月末段階	—	1)連携校オンライン教員交流会の開催 2)連携校オンライン生徒交流会の開催 3)連携校オンライン生徒国際会議の開催	同左	(策定段階の項目に以下を追加) 6)WWL・SGH 甲子園後継事業の開催	—
		2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	—
	策定段階	同左				
	2023年3月末段階	—				
		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
【千里国際高等部】 探究型授業におけるフィールドスタディの実施	策定段階	—	新コーディネータによるフィールドスタディの実施とそのブラッシュアップ	フィールドスタディの実施とそのブラッシュアップ		
	2023年3月末段階	—	—	—		
		2024年度	2025年度	2026年度	2027年度	—
	策定段階					
	2023年3月末段階					

## 3. 費用計画・人員計画

【費用・人員を必要とする理由】

非公開

経費 単位:万円

2019 年度 承認

2020 年度 承認

2021 年度 承認

2022 年度 承認

非公開

人員・人件費 単位:万円

2019 年度 承認

2020 年度 承認

2021 年度 承認

2022 年度 承認

非公開

経費 単位:万円

2023 年度 承認

2024 年度

2025 年度

左記以降

非公開

人員・人件費 単位:万円	2023年度 承認	2024年度	2025年度	左記以降
非公開				

#### 4. 進捗状況・得られた成果

2019年度	<p>【ALプログラムについて】</p> <p>AIの活用によりSDGsの課題を解決できる能力を涵養することを通じて、Society 5.0を牽引し世界で活躍できるビジョンや資質・能力を有したイノベティブなグローバル人材の育成を支援するために、ALプログラムにおいて、WWL・AI活用人材育成プログラムのストーリーミング教材を10本製作し、Ed-Tech（リクルートのスタディサプリ）を介して、拠点校・連携校生徒に提供した。これはWWL構築支援事業における先導的で挑戦的な取り組みであり、政府の総合改革イノベーション戦略におけるAI活用人材育成の方針とも合致する内容である。</p> <p>ストーリーミングに加え、各生徒の課題研究を実践的なものにするためにワークショップを開催し、大学教員派遣事業、課題研究に関する発表会等の高大連携事業を展開した。</p> <p>【拠点校プログラムについて】</p> <p>今年度は今後の活動の基盤づくりに時間をかけた1年であった。「SGH事業での課題と反省を踏まえたプランニング」を基軸に、「全ての教職員が同じゴールを見据えた上で、学校を変革するために本事業に取り組むためのマインドセットの醸成」と「本事業の指定終了後も、人的にも経済的にも自走できるための体制づくり」に取り組んだ。今後、連携校等へ本校の取り組みをプロトタイプとして広げていくためにも、今年度はこのような根本的な見直しの時とした。</p> <p>【千里国際高等部 探究型授業におけるフィールドスタディの実施について】</p> <p>2019年度はSGHプログラムの最終年度であったため、本実施計画としての取り組みはなかったが、次年度からのフィールドスタディ実施を視野に入れた様々な活動を行うことができた。</p>
2020年度	<p>【ALプログラムについて】</p> <p>コロナ禍の中ではあったがオンラインを活用して以下のプログラム等を実施した。</p> <p>1) WWL・AI活用人材育成プログラム ①AI活用人材育成講座（ストーリーミング） ②AI活用人材育成プログラム・ワークショップ ③AI活用人材育成プログラム・ネットコミュニケーション ④Sci-Tech リサーチ・フォーラム 2) SDGs・地域課題等社会課題を解決するための実践的な学びへの支援、STEM系の「探究・課題研究」への支援（講師派遣等） 3) WWL 校対象のアドバンストプレースメント（単位履修・高大連携科目）の検討 4) Harvard College Japan Initiative 関西学院大学ワークショップ 5) WWL・SGH×探究甲子園 6) 高校生国際交流のつどい</p> <p>なお、高校生公開討論会は探究甲子園に統合されたことにより廃止となり、関西学院世界市民明石塾は中止となった。</p> <p>【拠点校プログラムについて】</p>

	<p>今年度はコロナ禍の影響を大きく受け、出来なくなったことも多かったが、逆にこの状況だからこそ産み出されたものも多くあり、総括すると概ね当初の計画を達成できたと考えている。特に、昨年度からの課題としていた、事業連携校への働きかけとして「連携校教員オンライン交流会」「連携校生徒オンライン交流会」の実施、更には来年度計画していた国際会議を前倒しする形で「連携校生徒オンライン国際会議」も開催することができた。</p> <p>【千里国際高等部 探究型授業におけるフィールドスタディの実施について】</p> <p>総合探究型授業は、SGH 期間中と同様にコーディネーターを配置し、各教科の授業として実施した。フィールドスタディについては、40 名超の訪問もしくは来校依頼を計画していたが、実際にはほぼオンラインにて 32 名の話聞くことができた。特に、実地体験等については、1 プロジェクトのみ宿泊を伴う形で実施できたが、他はすべて日帰りまたはオンラインでの実施となった。</p>
2021 年度	<p>【ALプログラムについて】</p> <p>コロナ禍ではあったがオンライン等を活用し、以下のプログラム等を実施した。</p> <p>1) WWL・AI 活用人材育成プログラム ①AI 活用人材育成講座（ストリーミング） ②AI 活用人材育成プログラム・ネットコミュニケーション ③Sci-Tech リサーチ・フォーラム 2) SDGs・地域課題等社会課題を解決するための実践的な学びへの支援、STEM系の「探究・課題研究」への支援（講師派遣等） 3) WWL 校対象のアドバンストプレースメント（単位履修・高大連携科目）の検討 4) 関西学院世界市民明石塾 5) WWL x 探究甲子園 6) 高校生国際交流のつどい</p> <p>【拠点校プログラムについて】</p> <p>文部科学省のカリキュラム指定校最終年度となった今年度も、引き続きコロナ禍の影響を受けつつも当初の計画を達成できたと考えている。新規に組織した探究型カリキュラム委員会を中心に、各学年において開発した様々な探究型授業の改善を続けると共に、昨年度に引き続き「連携校教員オンライン交流会」「連携校生徒オンライン交流会」「連携校生徒オンライン国際会議」といった、学校を超えた協働を可能とする場を主催した。</p> <p>【千里国際高等部 探究型学習におけるフィールドスタディの実施について】探究型学習の発展的な形態として全 11 年生（高 2）を対象にフィールドスタディを開始した。可能な限り現地、現場に行き当事者に会うことを実現した。20 年度の進捗状況の説明にも表れているようにこの学習形態を「授業」としてデザインするという根本的な誤りがある。22 年度に向けてフィールドスタディが扱う領域とプログラムの抜本的改訂作業、さらに教員の意識改革を進めている。</p>
2022 年度	
2023 年度	
2024 年度	

## 5. 今後の課題及び方向性

2019年度	<p>【ALプログラムについて】 令和2年3月現在、連携校として26校がALネットワークに加盟しており、これらの高等学校の取り組みは①拠点校と共同でプログラム開発に参加する高等学校と、②高校毎の課題研究にAI活用の視点を盛り込むため、プログラムを活用する高等学校の2つに大別される。 各高等学校においてテーマを定めた課題研究に取り組んでいるなか、「AI for SDGs」の視点で課題研究に取り組む生徒の支援の課題が浮き彫りとなった。</p> <p>【拠点校プログラムについて】（拠点校高等部） 解決すべきSDGsのテーマ「地球と人類に貢献する平和構築のための学び」に焦点をあて、先進的なカリキュラムの研究開発・実践を行う。その目的を達成するために、令和元年度に引き続き以下の取り組みを行う。</p>
2020年度	<p>【ALプログラムについて】 2019年度で浮き彫りとなった課題に対応するため、昨年度からスタートしたAI活用人材育成講座（ストーリーミング）（通年）に加えて、AI活用人材育成プログラム・ワークショップを1年次対象、2年次対象で内容を設定して実施するほか、AI活用人材育成プログラム・ネットコミュニケーション（通年・新規）として連携校生徒向けにSNSを活用して課題研究のアドバイスを行うことを計画している。しかしながら、AI活用人材育成を担当する人的資源が不足しているため、担当の巳波教授に大きな負荷がかかっており、人員の補充が急務である。</p> <p>【拠点校（高等部）によるプログラムの提供】 2年目となる2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大による影響のため、当初の計画通りの実施が困難な状況であるが、1年生対象の「グローバル探究BASIC」と2年生対象の「グローバル探究A AI活用」、「グローバル探究B ハンズオンラーニング」、「グローバル探究C グローバルスタディ」を実施する。</p> <p>【千里国際高等部 探究型授業におけるフィールドスタディの実施について】 5年間のSGHとしての取り組みを終え、2020年度はSGC(Super Global Citizenship Program)と名付けたプログラムに取り組む。5年間で構築した「2年生全員がフィールドスタディに参加して識者にインタビューを行い、それをもとに個人の研究活動に取り組む」ことは、SGHの5年間からの継続実施であるが、大きな変更点として、総合探究として全教員の関わりで実施していたものを、各教科から提供する授業として実施することが挙げられる。教科を越えた横の連携を保つために「総合探究科主任」のポジションを新設した。新しい体制において、質を落とさないフィールドスタディ（＝識者へのインタビューを核とする）を継続することが今年度の一歩の課題である。</p> <p>春学期に「フィールドスタディ」と名付けた各種授業の中から選択した授業を2年生生徒全員が履修したが、新型コロナウイルス蔓延の影響で春学期は全てがオンライン授業となり、学期中のフィールドスタディは実現しなかった。夏休み、秋学期にどのように延期が可能となるかは未定である。</p>
2021年度	<p>【ALプログラムについて】 WWLの事業委託期間が2021年度をもって終了することに伴い、各プログラムの継続可否も含め見直しを行う必要がある。</p> <p>【拠点校（高等部）によるプログラムの提供】 前述の通り、今年度で事業委託期間が終了するが、拠点校の高等部としては、これまでこの事業を通じて育ててきた「探究型の授業」「教科を超えた学校全体としての協働作業」「学校を超えた協働作業」は、今後の教育活動の根幹を成すものと認識しており、更に、学校全体の活動として広げて行く準備がある。形成してきた事業連携校とのネットワークも含めて継続していくことを希望している。</p> <p>【千里国際高等部 探究型授業におけるフィールドスタディの実施について】 探究型授業は2022年度からは正式に文科省の指導要領に含まれる見込みであり、これまでの経験を踏まえて正規カリキュラムとして提供を継続する予定である。フィールドスタディも継続して実施の予定であるが、コロナ禍の影響によっては実施内容の変更を検討する必要がある。</p>
2022年度	<p>【ALプログラムについて】 WWLの事業委託期間が2021年度をもって終了したことに伴い、各プログラムについては委託前と同様に各部署の責任のもと進めていく。</p> <p>【拠点校（高等部）によるプログラムの提供】 今年度以降は「カリキュラム指定校」ではなくなるが、引き続き「WWL事業拠点校」として自走することを文部科学省から依頼されている。これまでの果実を更に高等部のカリキュラムに落とし込みながら、本校だけでなく様々な学校と他の組織や人をつなぐネットワークのハブとなれるような活動を続けていく。その一端として、惜しまれつつも昨年度で終了した「WWL・SGH×探究甲子園」の後継となるような、各地の様々な学校が、「探究」をキーワードに交流を深めることができるような場を、企業等の協力も得ながら提供することを計画している。</p> <p>【千里国際高等部 発展的な探究型学習のデザイン】 WWLの事業委託期間が2021年度をもって終了したことに伴い、千里国際高等部の責任のもと、本プログラム</p>



	を運営する。
2023 年度	
2024 年度	

## 6. 学院総合企画会議の基本方針

2019 年度	WWL事業における補助金対象外である、[高等部]海外交流アドバイザー、カリキュラムアドバイザー、[高大接続センター]国際交流・課題解決等研究会運営費を認めます。 また、WWL 事業に関連する、[高等部]グローバルリーダーズプログラム実施経費、[千里国際高等部]探究型プログラム実施経費も認めます。
2020 年度	WWL事業における、[高等部]海外交流アドバイザー等、[高大接続センター]国際交流・課題解決等研究会運営費等を認めます。また、WWL 事業に関連する、[千里国際高等部]探究型プログラム実施経費も認めます。
2021 年度	WWL事業の継続・自走化に必要な海外交流アドバイザー謝礼等を認めます。 カリキュラムアドバイザー手当、事務補助員、常勤講師 2 名の継続配置を認めます。
2022 年度	WWL 事業の後継となる「探究型カリキュラム教育」の継続に必要なカリキュラムアドバイザー手当、事務補助員、常勤講師 2 名の継続を認めます。 また、フィールドワーク・プログラム参加費補助を除く、海外交流アドバイザー謝礼等の経費を認めます。
2023 年度	
2024 年度	

## 7. Total Review の結果

## 【フェーズ I (2019~2021)】

レビュー結果	可否	備考 (継続:「フェーズ II に向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部においては、探究型授業の拡大とそれを評価するツールを制定した。今後、その成果を検証する必要がある。</li> <li>・管理機関(大学)として、連携校へのプログラム提供やイベントの共同開催など、継続する必要がある。</li> <li>・採択に伴いカリキュラムを改編したため、増員した教員体制を保持していく必要がある。</li> <li>・千里国際高等部においては、SGH 終了後も学院が財政支援し、「総合探究」科目の充実を図った。</li> </ul>	継続 ・ 廃止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポスト WWL を見据えた実施体制等の検討</li> </ul>

## 【フェーズ II (2022~2024)】

レビュー結果	可否	備考 (継続:「フェーズ II に向けた課題」 廃止:その理由と今後の方向性)
	継続 ・ 廃止	